

中国怪奇小説集

閱微草堂筆記（清）

岡本綺堂

青空文庫

第十五の男は語る。

「わたくしは最後に『閱微草堂筆記』を受持つことになりましたが、これは前の『子不語』にまさる大物で、作者は観奕道人と署名してありますが、実は清の紀昀であります。紀昀は号を暁嵐といい、乾隆時代の進士で、協弁大学士に進み、官選の四庫全書を作る時には編集総裁に挙げられ、学者として、詩人として知られて居ります。死して文達公と諡おくりなされましたので、普通に紀文達とも申します。

この著作は一度に脱稿したのではなく、最初に『灤陽鎖夏録』六巻を編み、次に『如是我聞』四巻、次に『槐西雜誌』四巻、次に『姑妄聽之』四巻、次に『灤陽続録』六巻を編み、あわせて二十四巻に及んだものを集成して、『閱微草堂筆記』の名を冠かぶらせたのでありまして、実に一千二百八十二種の奇事異聞を蒐録しゅうろくしてあるのですから、とても一朝一夕せきに説き尽くされるわけのものではありません。もしその全貌を知ろうとおぼしめす方は、どうぞ原本に就いてゆるゆる御閲読をねがいます」

清しんの雍よう正せい十年六月の夜に大雷雨がおこつて、猷けん県の皇城の西にある某村では、村民なにかしが落雷に撃たれて死んだ。

明めいという県令が出張して、その死体を検視したが、それから半月の後、突然ある者を捕えて訊問した。

「おまえは何のために火薬を買ったのだ」

「鳥を捕るためでございます」

「雀ぐらいを撃つ弾たまぐすり薬ならば幾らもいる筈はない。おまえは何で二、三十斤きんの火薬を買ったのだ」

「一度に買い込んで、貯えて置こうと思つたのでございます」

「おまえは火薬を買つてから、まだひと月にもならない。多く費したとしても、一斤か二斤に過ぎない筈だが、残りの薬はどこに貯えてある」

これには彼も行き詰まつて、とうとう白状した。彼はかの村民の妻と姦通していて、妻と共謀の末にその夫を爆殺し、あたかも落雷で震死したようによそおつたのであった。その裁判落着の後、ある人が県令に訊いた。

「あなたはどうしてあの男に眼を着けられたのですか」

「火薬を爆発させて雷らいと見せるには、どうしても数十斤を要する。殊ごうやくに合薬として硫黄いおうを用いなければならぬ。今は暑中で爆竹などを放つ時節でないから、硫黄のたぐいを買う人間は極めてすくない。わたしはひそかに人をやって、この町でたくさんの硫黄を買った者を調べさせると、その買手はすぐに判った。更にその買手を調べさせると、村民のなにかしに売ったという。それで彼が犯人であると判ったのだ」

「それにしても、当夜の雷がこしらえ物であるということがどうして判りました」

「雷が人を撃つ場合は、言うまでもなく上から下へ落ちる。家屋を撃ちこわす場合は、家や根ねを打ち破るばかりで、地を傷めないのが普通である。然るに今度の落雷の現場を取調べると、草葺き家根が上にむかつて飛んでいるばかりか、土間の地面が引きめくつたように剥はがれている。それが不審の第一である。又その現場は城を距さること僅か五、六里で、雷電もほぼ同じかるべき筈であるが、当夜の雷はかなり迅烈であつたとはいえ、みな空中をとどろき渡っているばかりで、落雷した様子はなかつた。それらを綜合して、わたしはそれを地上の偽雷と認めたのである」

人は県令の明察に服した。

鄭成功と異僧

鄭成功が台湾に拠るとき、粵東の地方から一人の異僧が海を渡つて来た。かれは劍術と拳法に精達しているばかりか、肌をぬいで端坐していると、刃で撃つても切ることが出来ず、堅きこと鉄石の如くであつた。彼はまた軍法にも通じていて、兵を談ずることすこぶるその要を得ていた。

鄭成功は努めて四方の豪傑を招いている際であつたので、礼を厚うして彼を欵待したが、日を経るにしたがつて彼はだんだんに増長して、傲慢無礼の振舞いがたびかさなるので、鄭成功もしまいには堪えられなくなつて来た。且かれは清国の間牒であるという疑いも生じて来たので、いつそ彼を殺してしまおうと思つたが、前にもいう通り、彼は武芸に達している上に、一種の不死身のような妖僧であるので、迂闊に手を出すことを躊躇してゐると、その大将の劉国軒が言つた。

「よろしい。その役目はわたくしが勤めましよう」

劉はかの僧をたずねて、冗談のように話しかけた。

「あなたのような生き仏は、色情のことはなんにもお考えになりますまいな」

「久しく修業を積んでいますから、心は地に落ちたる絮わたの如くでござる」と、僧は答えた。劉はいよいよ戯たわむれるように言った。

「それでは、ここであなたの道心を試みて、いよいよ諸人の信仰を高めさせて見たいものです」

そこで美しい遊女や、男なんしよく色いろを売る少年や、十人あまりを扱えりあつめて、僧のまわりしとねに茵しとねをしき、枕まくらをならべさせて、その淫楽をほしいままにさせると、僧は眉をも動かさず、かたわらに人なきがごとくに談笑自若としていたが、時を経るにつれて眼をそむけて、遂ついににその眼をまつたく瞑とじた。

その隙すきをみて、劉は剣をぬいたかと思うと、僧の首はころりと床に落ちた。

鬼影

泉州せんの人が或る夜、ともしびの前で自分の影をみかえると、壁に映っているのは自分の形でなかつた。

不思議に思つてよく視ると、大きい首に長い髪が乱れかかつて、手足は鳥の爪のように曲がつて尖つている。その影はたしかに一種の鬼であつた。しかも、その怪しい影は自分の形に伴つていて、自分の動く通りに動いているのである。大いにおどろいて家内の者を呼びあつめると、その影は誰の眼にも怪しく見えるのであつた。

それが毎晩つづくので、その人も怖ろしくなつた。家内の者もみな懼れた。しかしその子細は判らないので、唯いたずらに憂い懼れていると、となりに住んでいる塾の先生が言つた。

「すべての妖はみずから興るのでなく、人に因つて興るのである。あなたは人に知られない悪念を懐いているので、その心の影が羅刹となつて現われるのではあるまいか」

その人は慄然として、先生の前に懺悔した。

「実はわたくしは或る人に恨みを含んでいたので、近いうちにその一家をみな殺しにして、ここを逃げ去つて、賊徒の群れに投じようかと考えていたところでした。今のお話でわたくしも怖ろしくなりました。そんな企ては断然やめます」

その晩から彼の影は元の形に復つた。

茉莉花

閩中^{みんちゆう}の或る人の娘はまだ嫁入りをしないうちに死んだ。それを葬ること^{かた}式のごとくであつた。

それから一年ほど過ぎた後、その親戚の者がとなりの県で、彼女とおなじ女を見た。その顔かたちから^{こわね}声音までが余りによく肖^にているので、不意にその幼な名を呼びかけると、彼女は思わず振り返つたが、又もや足を早めて立ち去つた。

親戚は郷里へ歸つてそれを報告したので、両親も怪しんで娘の塚をあけてみると、果たして棺のなかは空^{から}になつていた。そこで、そのありか^{たず}を尋ねてゆくと、女は両親を識らな^{わき}いと言ひ張つていたが、その腋^{わき}の下に大きい痣^{あざ}があるのが証拠となつて、彼女はとうとう恐れ入つた。その相手の男をたずねると、もうどこへか姿をかくしていた。

だんだんその事情を取調べると、閩中には茉莉花^{まつりか}を飲めば仮死するという伝説がある。茉莉花の根を磨^すつて、酒にまぜ合わせて飲むのである。根の長さ一寸を用ゆれば、仮死すること一日にして蘇生する。六、七寸を用ゆれば、仮死すること数日にしてなお蘇生することが出来る。七寸以上を用ゆれば、本当に死んでしまうのである。かの娘はすでに約束

の婿がありながら、他の男と情を通じたので、男と相談の上で茉莉花を用い、そら死にをして一旦葬られた後に、男が棺をあばいて連れ出したものであることが判った。男もやがて捕われたが、その申し立ては娘と同様であった。

閩の県官呉林塘という人がそれを裁判したが、棺をあばいた罪に照らそうとすれば、その人は死んでいないのである。薬剤をもって子女を惑わしたという罪に問おうとすれば、娘も最初から共謀である。さりとて、財物を奪ったとか、拐引を働いたとかいいうのもない。結局、その娘も男も姦通の罪に処せられることになった。

仏陀の示現

景城の南に古寺があった。あたりに人家もなく、その寺に住職と二人の徒弟が住んでいたが、いずれもぼんやりした者どもで、わずかに仏前に香火を供うるのほかには能がないように見られた。

しかも彼等はなかなかの曲者で、ひそかに松脂を買って来て、それを粉にして練りあわせ、紙にまいて火をつけて、夜ちゆうに高く飛ばせると、その火のひかりは四方を照

らした。それを望んで村民が駈けつけると、住職も徒弟も戸を閉じて熟睡していて、なんにも知らないというのである。

又あるときは、戯場しばいで用いる仏衣を買つて来て、菩薩や羅漢の形をよそおい、月の明るい夜に家根の上に立つたり、樹の蔭にたたずんだりする事もある。それを望んで駈け付けると、やはりなんにも知らないというのである。或る者がその話をする、住職らは合掌して答えた。

「飛んでもないことを仰しやるな。み仏は遠い西の空にござる。なんでこんな田舎の破やれで寺らに示現しげんなされましようぞ。お上かみではただいま白蓮びやくれんきやう教きやうをきびしく禁じていられます。そんな噂こつむがきこえると、われわれもその邪教をおこなう者と見なされて、どんなお咎とがめを蒙こうむるかも知れません。お前方もわれわれに恨みがある訳でもござるまいに、そんなことを無暗に言い触らして、われわれに迷惑をかけて下さるな」

いかにも殊勝な申し分であるので、諸人はいよいよ仏陀の示現と信じるようになって、檀家ふせの布施ふせや寄進きしんが日ましに多くなつた。それに付けても、寺があまりに荒れ朽ちているので、その修繕を勧める者があると、僧らは、一本の柱、一枚の瓦を換えることをも承知しなかつた。

「ここらの人はとかくにあらぬことを言い触らす癖があつて、後光がさしたの、菩薩があらわれたのと言う。その矢さきに堂塔などを莊嚴そうごんにいたしたら、それに就いて又もや何を言い出すか判らない。どなたが寄進して下さるといつても、寺の修繕などはお断わり申します」

こういうふうであるから、諸人の信仰はいや増すばかりで、僧らは十余年のあいだに大なる富を作つたが、又それを知っている賊徒があつて、ある夜この寺を襲つて師弟三人を殺し、貯蓄の財貨をことごとく掠めて去つた。役人が来て検視の際に、古い箱のなかから戯場の衣裳や松脂の粉を発見して、ここに初めてかれらの巧みが露顕したのであつた。これは明の崇禎の末年のことである。

強盜

齊大は猷県の地方を横行する強盜であつた。

あるとき味方の者を大勢連れて或る家へ押し込むと、その家の娘が美婦であるので、賊徒は逼つてこれを汚そうとしたが、女がなかなか応じないので、かれらは女をうしろ手

にくくりあげた。そのとき齊大は家根に登つて、近所の者や捕手の来るのを見張つていたが、女の泣き叫ぶ声を聞きつけて、降りて来てみるとこの体たらくである。彼は刃をぬいてその場に跳り込んだ。

「貴様らは何でそんなことをする。こうなれば、おれが相手だぞ」

餓えたる虎のごとき眼を晃らせて、彼はあたりを睨みまわしたので、賊徒は恐れて手を引いて、女の節操は幸いに救われた。

その後、この賊徒の一群はみな捕えられたが、ただその頭領の齊大だけは不思議に逃がれた。賊徒の申し立てによれば、逮捕の当時、齊大はまぐさ桶の下に隠れていたというのであるが、捕手らの眼にはそれが見えなかつた。まぐさ桶の下には古い竹束が転がつていただけであつた。

張福の遺書

張福は杜林鎮の人で、荷物の運搬を業としていた。ある日、途中で村の豪家の主人に出逢つたが、たがいに路を譲らないために喧嘩をはじめ、豪家の主人は従僕に指図

して張を石橋の下へ突き落した。あたかも川の氷が固くなつて、その稜は刃のように尖つていたので、張はあたまを撃ち割られて半死半生になつた。

村役人は平生からその豪家を憎んでいたので、すぐに官に訴えた。官の役人も相手が豪家であるから、この際いじめつけてやろうというので、その詮議が甚だ嚴重になつた。そのときに重態の張はひそかに母を豪家へつかわして、こう言わせた。

「わたしの代りにあなたの命を取つても仕方がありません。わたしの亡い後に、老母や幼な児の世話をして下さるといふならば、わたしは自分の粗相で滑り落ちたと申し立てます」豪家では無論に承知した。張はどうにか文字の書ける男であるので、その通りに書き残して死んだ。何分にも本人自身の書置きがあつて、豪家の無罪は証明されているのであるから、役人たちもどうすることも出来ないで、この一件は無事に落着した。

張の死んだ後、豪家も最初は約束を守つていたが、だんだんにそれを怠るようになったので、張の老母は怨み憤つて官に訴えたが、張が自筆の生き証拠がある以上、今更この事件の審議をくつがえす事は出来なかつた。

しかもその豪家の主人は、ある夜、酒に酔つてかの川べりを通ると、馬がにわかに駭いたために川のなかへ転げ落ちて、あたかも張とおなじ場所で死んだ。

知る者はみな張に背いた報いであると言った。世の訴訟事件には往々こうした秘密がある。獄を断ずる者は深く考えなければならぬ。

飛天夜叉

ウロホクセイ 烏魯木齊は新疆の一地方で、甚だ未開辺僻の地である（筆者、紀曉嵐は曾てこの地にあつたので、烏魯木齊地方の出来事をたくさんに書いている）。その把総（軍官で、陸軍少尉の如きものである）を勤めている蔡良棟が話した。

この地方が初めて平定した時、四方を巡回して南山の深いところへ分け入ると、日もよやく暮れかかつて来た。見ると、溪を隔てた向う岸に人の影がある。もしや瑪哈沁（この地方でいう追剥ぎである）ではないかと疑つて、草むらに身をひそめて窺うと、一人の軍装をした男が磐石の上に坐つて、そのそばには相貌獐悪の従卒が数人控えている。なにか言っているらしいが、遠いのでよく聴き取れない。

やがて一人の従卒に指図して、石の洞から六人の女をひき出して来た。女はみな色の白い、美しい者ばかりで、身にはいろいろの色彩のある美服を着けていたが、いずれも後

ろ手にくくり上げられて恐るおそるに頭を垂れてひざまずくと、石上の男はかれらを一人ずつ自分の前に召し出して、下衣を剥がせて地にひき伏せ、鞭をあげて打ち据えるのである。打てば血が流れ、その哀号の声はあたりの森に木訶して、凄惨実に譬えようもなかった。

その折檻が終ると、男は従卒と共にどこへか立ち去った。女どもはそれを見送り果てて、いずれも泣く泣く元の洞へ帰って行った。男は何者であるか、女は何者であるか、もとより判らない。一行のうちに弓をよく引く者があつたので、向う岸の立ち木にむかつて二本の矢を射込んで帰った。

あくる日、廻り路をして向う岸へ行き着いて、きのうの矢を目じるしに搜索すると、石の洞門は塵に封じられていた。松明をとって進み入ると、深さ四丈ばかりで行き止まりになつてしまつて、他には抜け路もないらしく、結局なんの獲るところもなしに引き揚げて来た。

蔡はこの話をして、自分が烏魯木齊にあるあいだに目撃した奇怪の事件は、これをもつて第一と言つた。わたしにも判らないが、太平広記に、天人が飛天夜叉を捕えて成敗する話が載せてある。飛天夜叉は美女である。蔡の見たのも或いはこの夜叉のたぐいで

あるかも知れない。

喇嘛教

喇嘛教らまきょうには二種あつて、一を黄教といい、他を紅教といい、その衣服をもつて區別するのである。黄教は道德を講じ、因果を明らかにし、かの禪家ぜんけと派ことを異にして源を同じゅうするものである。

但し紅教は幻術げんじゆつを巧みにするものである。理藩院りはんいんの尚書を勤める留りゆうという人が曾て西藏ちへつとに駐在しているときに、何かの事で一人の紅教喇嘛に恨まれた。そこで、或る人が注意した。

「彼は復讐をするかも知れません。山登りのときには御用心なさい」

留は山へ登るとき、輿や行列をさきにして、自分は馬に乗つて後から行くと、果たして山の半腹に至つた頃に、前列の馬が俄かに狂い立つて、輿をめちやめちやに踏みこわした。輿は無論からに空であつた。

また、烏魯木齊に従軍の当時、軍士のうちで馬を失つた者があつた。一人の紅教喇嘛が

小さい木の腰掛けをとつて、なにか暫く呪文を唱えていると、腰掛けは自然にころころと転がり始めたので、その行くさきを追つてゆくと、ある谷間たにあいへ行き着いて、果たしてそこにかの馬を発見した。これは著者が親しく目撃したことである。

案ずるに、西域せいいきに刀を呑み、火を呑むたぐいの幻術を善くする者あることは、前漢時代の記録にも見えている。これも恐らくそれらの遺術を相伝したもので、仏氏の正しょう法ほうではない。それであるから、黄教の者は紅教徒を称して、あるいは魔といい、あるいは波羅門らもんという。すなわち仏経にいわゆる邪魔外道じやまげどうである。けだし、そのたぐいであろう。

滴血

晋しんの人でその資産を弟に托たくして、久しく他郷たきしょうに出商いをしている者があつた。旅さきで妻を娶めとつて一人の子を儲けたが、十年あまりの後に妻が病死したので、その子連れて故郷へ歸つて来た。

兄が子連れて歸つた以上、弟はその資産をその子に譲り渡さなければならぬので、その子は兄の実子でなく、旅さきの妻が他人の種を宿して生んだものであるから、異姓の

子に資産を譲ることは出来ないと言張した。それが一種の口実こうじつであることは大抵想像されていゝるものの、何分にも旅さきの事といひ、その妻ももう此の世にはいないので、事實の真偽を確かめるのがむずかしく、たがいに捫もんちやく着やくをかさねた末に、官へ訴えて出るこゝとになつた。

官の力で調査したらば、弟の申し立てが嘘か本当かを知ることが出来たかも知れないが、役人らはいたずらに古法を守つて、滴血てきけつをおこなうことにした。兄の血と、その子の血とを一つ器うつわにそそぎ入れて、それが一つに融け合うかどうかを試したのである。幸いにその血が一つに合つたので、裁判は直ちに兄側の勝訴となつて、弟は答むちうつて放逐するといふ宣告を受けた。

しかし弟は、滴血などという古風の裁判を信じないと言つた。彼は自分にも一人の子があるのでは、試みにその血をそそいでみると、かれらの血は一つに合わなかつた。彼はそれを証拠にして、現在、父子おやこすらもその血が一つに合わないのであるから、滴血などをもつて裁判をくだされては甚だ迷惑であると、逆捻さかねじに上訴した。彼としては相当の理屈もあつたのであろうが、不幸にして彼は周囲の人びとから憎まれていた。

「あの父子の血が一つに寄らないのは当り前だ。あの男の女房は、ほかの男と姦通してい

るのだ」

この噂が官にきこえて、その妻を拘引して吟味すると、果たしてそれが事実であったので、弟は面目を失つて、妻を捨て、子を捨てて、どこへか夜逃げをしてしまった。その資産はとどこおりなく兄に引き渡された。

由来、滴血のことは遠い漢代から伝えられているが、経験ある老吏について著者の聞いたところに拠ると、親身の者の血が一つに合うのは事実である。しかし冬の寒い時に、その器を冷やして血をそそぐか、あるいは夏の暑いときに、塩と酢をもつてその器を拭いた上で血をそそぐと、いずれもその血が別々に凝結して一つに寄り合わない。そういう特殊の場合がいろいろあるから、迂闊に滴血などを信ずるのは危険であると、彼は説明した。

成程そうであろうと思われる。しかしこの場合、もし滴血をおこなわなければ、弟はおそらく上訴しなかつたであろう。弟が上訴しなければ、その妻の陰事は摘発されなかつたであろう。妻の陰事が露顕しなければ、この裁判はいつまでも落着らくちやくしなかつたであろう。こうなると、あながちに役人の不用意を咎めるわけにも行かない。そのあいだには何か自然の約束があるようにも思われるではないか。

不思議な顔

蒙陰もういんの劉生りゆうせいがある時その徒弟いとしの家いへに泊とどまった。いろいろの話の末に、この頃この家には一種の怪物があらわれる。出没常ならず、どこに潜ひそんでいるか判わからないが、暗闇で出逢であうと人を突きたおすのである。そのからだの堅かたきこと鉄石のごとくであると、家内の者が語かたった。

劉は獵かりを好んで、常に鉄砲を持ちあるいているので、それを聞いて笑わらった。

「よろしい。その怪物が出て来たらば、この鉄砲で防まもぎます」

書齋は三間になつていたので、彼はその東の室へやで寝ることにした。燈火ともしびにむかつて独りひとりで坐まつていと、西の室から何者か現あらわれて立たつた。その五体は人の如くであるが、その顔が頗る不思議で、眼と眉とのあいだは二寸ぐらゐも距はなれているにも拘まらず、鼻と口とはほとんど一つに付ついているばかりか、その位置も妙に曲まがっていた。顔の輪郭もまたゆがんでいる。よく見ると、不思議というよりも頗る滑稽な顔ではあるが、なにしろ一種の怪物には相違ないと見て、劉はすぐに鉄砲をとつて窺のぞうと、かれは慌あわてて室内へ退ひいて、扉のあいだから半面を出して窺のぞっているのである。

劉が鉄砲をおろすと、彼はそろそろ出かかる。劉がふたたび鉄砲をむけると、彼はまた隠れる。そんなことを幾たびも繰り返しているうちに、彼はたちまち顔の全面をあらわして、舌を吐き、手を振って、劉を嘲るかのようにも見えたので、急に一発を射撃すると、弾は扉にあたつて怪物の姿は隠れた。

劉は窓格子のあいだに鉄砲を伏せて、再びその現われるのを待っていると、彼はふたたび出て来て弾にあたつた。その仆る時、あたかも家根瓦の落ちて碎けるような響きを発したのである。近寄つてみると、それは毀れた甕の破片であつた。

更にあらためると、怪物の正体はこの家にある古い甕であることが判つた。

それが不思議な顔をしていたのは、小児がその甕のおもてへいたずら書きをしたのである。小児が手あたり次第に書いたのであるから、人間の顔がおかしくゆがんで、眼も鼻も勿論ととのつていない。それでも人間の顔を具えたために、こんな怪をなすようになったのかも知れないのであつた。

顔良の祠

呂城は呉の呂蒙りよもうちょうの築いたものである。河をはさんで、兩岸に二つの祠やしらうがある。

その一つは唐の名将郭子儀かくしぎの祠である。郭子儀がどうしてこんな所に祀られているのか判らない。他の一つは三国時代の袁紹えんしやうの部将の顔良がんりやうを祀つたもので、これもその由来は想像しかねるが、土地の者が禱いのるとすこぶる靈驗があるというので、甚だ信仰されている。

それがために、その周囲十五里のあいだには関帝廟かんでいびやう（関羽を祀る廟）を置くことを許さない。顔良は関羽かんゆうに殺されたからである。もし関帝廟を置けば必ず禍いがあると伝えられている。ある時、その土地の県令がそれを信じないで、顔良の祠の祭りのときに自分も参詣し、わざと俳優に三国志の演劇しやいを演じさせると、たちまちに狂風どつと吹きよせて、演劇の仮小屋の家根も舞台も宙にまき上げて投げ落したので、俳優のうちには死人も出来た。

そればかりでなく、十五里の区域内には疫病が大いに流行して、人畜の死する者おびただしく、かの県令も病いにかかつて危うく死にかかったというのである。

およそ戦いに負けたといつて、一々その敵を怨むことになつては、古来の名将勇士は何千人たに崇たられるか判らない。顔良の輩が千年の後までも関羽に崇るなど、決して有り得べ

きことではない。これは祠に仕える巫女みこのやからが何かのことを言い触らし、愚民がそれを信ずる虚に乗じて、他の山妖水怪のたぐいが入り込んで、みだりに禍福をほしいままにするのであろう。

繡鸞

父の先妻の張夫人に繡鸞しゅうらんという侍女こしもとがあつた。

ある月夜に、夫人が堂の階段きざはしに立つて繡鸞を呼ぶと、東西の廊下から同じ女が出て来た。顔かたちから着物は勿論、右の襟の角の反れているのから、左の袖を半分捲いているのまで、すべて寸分も違わないので、夫人はおどろいて殆んど仆れそうになった。やがて気を鎮めてよく視ると、繡鸞の姿はいつか一人になつていた。

「お前はどつちから来ました」

「西のお廊下から参りました」

「東の廊下から来た人を見ましたか」

「いいえ」

これは七月のことで、その十一月に夫人は世を去った。彼女の寿命がまさに尽きんとするので、妖怪が姿を現わすようになったのかとも思われる。

牛冤ぎゆうえん

姚安公ちようあんこうが刑部に勤めている時、徳勝門外に七人組の強盗があつて、その五人は逮捕されたが、王五おうごと金大牙きんだいがの二人はまだ縛ばくに就かなかつた。

王五は逃れて、県かくにゆくと、路は狭く、溝は深く、わずかに一人が通られるだけの小さい橋が架けられていた。その橋のまんなかに逞ましい牛が眼を怒らせて伏していて、近づけば角つのを振り立てる。王はよんどころなく引返して、路をかえて行こうとする時、あたかも邏卒らそつが来合あわせて捕えられた。

一方の金大牙は清河橋せいがきようの北へ落ちてゆくと、牧童が二頭の牛を追つて来て、金に突き当つて泥のなかへ転がしたので、彼は怒つてその牧童と喧嘩をはじめた。ここは都に近い所で、金を見識しっている者が土地の役人に訴えた為に、彼もまた縛られた。

王も金も回部の民で、みな屠牛とぎゆうを業としている者である。それが牛のために失敗した

のも因縁いんねんであろう。

鳥を投げる男

雍正ようせいの末年である。東光城とうこう内で或る夜、家々の犬が一斉に吠えはじめた。その声は潮うしおの湧くが如くである。

人びとはみな驚いて出て見ると、月光のもとに怪しい男がある。彼は髪を乱して腰に垂れ、麻の帯をしめて蓑みのを着て、手に大きい袋を持っていた。袋のなかにはたくさんの鵝がぢよや鴨の鳴き声がきこえた。彼は人家の家根の上に暫く突っ立っていて、やがて又、別の家の屋根へ移って行つた。

明くる朝になつて見ると、彼が立っていた所には、二、三羽の鵝鳥や鴨が檐のきした下に投げ落されていた。それを煮て食つた者もあつたが、その味は普通の鳥と変つたこともなかつた。その当座はいかなる不思議か判らなかつた。

然るにその鳥を得た家には、みな葬式が出ることになつた。いわゆる凶きようさつが出現したのである。わたしの親戚の馬ばという家でも、その夜二羽の鴨を得たが、その歳に弟が死

んだ。思うに、昔から喪に逢うものは無数である。しかもその夜にかぎって、特に凶兆を示したのはなんの訳か。そうして、その兆を示すために、鵝鴨がおうのたぐいを投げたのはなんの訳か。

鬼神しよいの所為は凡人の知り得る事あり、知り得ざる事あり、ただその事実を録するのみで、議論の限りでない。

節婦

任士田にんしてんという人が話した。その郷里で、ある人が月夜に路を行くと、墓道の松や柏のあいだに二人が並び坐しているのを見た。

ひとりひとりは十六、七歳の可愛らしい男であった。他の女は白い髪を長く垂れ、腰をかがめて杖を持って、もう七、八十歳以上かとも思われた。

この二人は肩を摺り寄せて何か笑いながら語らていっている体、どうしても互いに惚れ合っているらしく見えたので、その人はひそかに訝いぶかつて、あんな婆さんが美少年と媾あいびき曳ひをしているのかと思ひながら、だんだんにその傍へ近寄つてゆくと、かれらのすがたは消えて

しまった。

次の日に、これは何なんびと人の墓であるかと訊きいてみると、某家の男が早死にをして、その妻は節を守ること五十余年、老死した後ここに合葬したのであることが判った。

木偶の演戯

わたしの先祖の光禄公こうろくこうは康熙年間、崔莊さいそうで質庫しちぐらを開いていた。沈伯玉ちんはくぎよくという男が番頭役の司事を勤めていた。

あるとき傀儡師かいらいしが二箱に入れた木彫りの人形を質入れに来た。人形の高さは一尺あまりで、すこぶる精巧に作られていたが、期限を越えてもつぐなわず、とうとう質流れになつてしまった。ほかに売る先もないので、廃り物すたとして空き屋のなかに久しく押し込んで置くと、月の明るい夜にその人形が幾つも現われて、あるいは踊り、あるいは舞い、さながら演劇しげいのような姿を見せた。耳を傾けると、何かの曲を唱えているようでもあつた。

沈は気丈の男であるので、声をはげしゅうして叱り付けると、人形の群れは一度に散つて消え失せた。翌日その人形をことごとく焚やいてしまったが、その後は別に変つたことも

なかつた。

物が久しくなると妖をなす。それを焚けば精気が溶けて散じ、再び聚あつまることが出来なくなる。また何か憑よる所があれば妖をなす。それを焚けば憑る所をうしなう。それが物理の自然である。

奇門遁甲

奇門遁甲きもんとんこうの書というものが多く世に伝えられている。しかも皆まことの伝授でない。

まことの伝授は口伝くでんの数語に過ぎないもので、筆や紙で書き伝えるのではない。

徳州とくの宋清遠そうせいえん先生は語る。あるとき友達をたずねると、その友達は宋をとどめて一泊させた。

「今夜はいい月夜だから、芝居を一つお目にかけてようか」

そこで、橙だいだいの実十余個を取って堂下だうげにころがして置いて、二人は堂にのぼって酒を飲んでみると、夜も二更にこうに及ぶころ、ひとりの男が垣を躓こえて忍び込んで来たが、彼は堂下をぐるぐる廻りして、一つの橙に出逢うごとに、よろけて躓つまずいて、ようように跨またいで通るの

であつた。

それが初めは順に進み、さらに曲がつて行き、逆に行き、百回も二百回も繰り返しているうちに、彼は疲れ切つて倒れ伏してしまつた。やがて夜が明けたので、友達はその男を堂の上に連れて来て、おまえは何しに来たのかと詰問すると、彼はあやまり入つて答えた。「わたくしは泥坊でございます。お宅へ忍び込みますと、低い垣が幾重にも作られて居ります。それを幾たび越えても、越えても、果てしがないので、閉口して引つ返そうとしますと、帰る路にもたくさんの垣があつて、幾たび越えても行き尽くせません。結局、疲れ果てて捕われることになりました。どうぞ御存分に願ひます」

友達は笑つて彼を放してやつた。そうして、宋にむかつて言つた。

「きのうあの泥坊が来ることを占ひ知つたので、たわむれに小術を用いたのです」

「その術はなんですか」

「奇門の法です。他人が迂闊におぼえると、かえつて禍いを招きます。あなたは謹直な人物である。もしお望みならば御伝授しましょうか」

折角であるが、自分はそれを望まないと宋は断つた。友達は嘆息して言つた。

「学ぶを願う者には伝うべからず、伝うべき者は学ぶを願わず。この術も終つひに絶えるであ

ろう」

彼は 悵ちよう 然ぜん として宋を送つて別れた。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：九尾乃雪舟齋

2003年8月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

閱微草堂筆記（清）

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>